

予測退けた背景に原発業界

3月11日に東日本を襲った大地震。地震学はこのように予刺し、警告を発してきたが、また今後の課題は――。地震予知連絡会の島崎邦彦会長に聞きました。

3月11日に東日本を襲った大地震と津波は「想定外」どころではありません。地震学は大規模な津波地震を予刺し、しかもその予測を公表していたのです。

1995年の阪神・淡路大震災後に、地震の調査・研究の成果を国民に伝えるために地震調査研究推進本部が政府に設置されました。その地震調査委員会・長期評価部会は、2002年7月31日の「長期評価」で、今回の地震と同じ日本海溝付近で生じる津波地震

は、岩手県沖や宮城県沖だけでなく、福島県沖から房総沖にかけても起きると予刺し、被害想定に含めるように主張しました。

津波地震とは、単に津波を伴うという意味ではなく、津波は大きいが揺れは小さいという特殊な地震です。この40年間で三つの地震について記録があり、一つは、1896年の明治三陸沖の津波地震。そのほか1611年の三陸沖と1677年の房総沖の地震があり、記録としては十分でなく

地震予知連絡会長 島崎邦彦さんに聞く

事態もそれほどわかってはいないのですが、最新の研究で震源は日本海溝部にあると考えてきました。

私たちはその上に立って、太平洋プレートは日本海溝沿いのどこでも沈み込むのだから、宮城県沖や房総沖だけでなく、今後、真ん中の宮城県南部や福島県沖でも起きると考えたのです。今回、この予測がある意味当たったわけですが、具体的な防災に生かされなかったことは大変残念です。

明確な根拠なし

03年7月に設置された政府の中央防災会議の専門会議では、私たちの主張は明確な論拠もなく退けられました。私たちの予測が無視された背景には、原子力業界の方が動いていたと感じています。

私たちが長期評価を出した1カ月前に、土木学会の原子力土木委員会津波評価部会が原子力発電所の設計のための津波評価を行っていました(02年2月)。これまで大きな津波が発生していない海域では、今後も大きな津波の発生を考えな

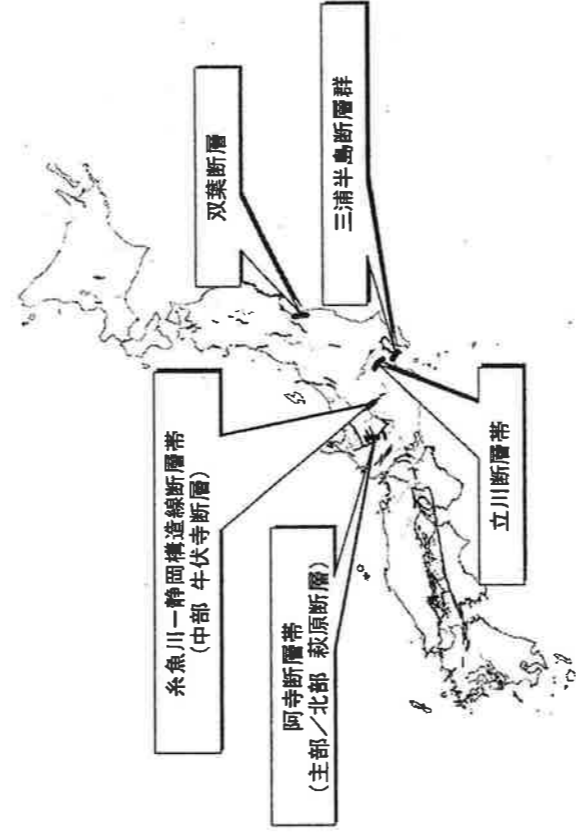
くていいという考え方が取られていました。

これは宮城県南部や福島県沖では津波地震を想定する必要なしということで、私たちの長期評価と真向から矛盾します。中央防災会議は、私たちの主張を捨て、原子力津波部会の見解に立ったのです。

政府の政策判断は太平洋

岸の堤防にわかりやすく示されています。牡鹿半島の先端より北側の海岸には津波堤防が続いていますが、南側には高潮堤防のみです。

今回の地震で最も多くの犠牲者が出た(約80名)のは、最も高い津波が押し寄せた岩手県久慈市から大船渡市ではなく、中央防災会



政府の地震調査研究推進本部は、東北地方太平洋沖地震の後活動が活発になっている活断層について調査結果を公表しています。図は同本部のホームページから。

検証なしに再稼働認められぬ

議の予想の2倍を超える高さの津波が来襲した地域です。

それが岩手県陸前高田市以南で、宮城県南部の仙台市若林区や名取、亶理、山元各地域へ、さらに福島県にかけて大被害を生み出した。

ここでは津波堤防の建設も、防災意識を高める対策や避難ビルの建設なども怠られました。福島第1原子力発電所でも非常電源が地下に置かれたままで、全電源喪失を引き起こしました。

どこでも明治三陸クラスの地震が発生すると考え、備えていけば、被害をかなり減らすことができたに違いない。それが無念でなりません。

地震の危険増大

今回の地震によって、間違いなく地震の可能性は大きくなり、5年から10年ぐらひは非常に危険な状況にあります。

日本列島は牡鹿半島付近で500kmくらい東に移動し、東西に伸びた格好で、東京周辺では北東・南西方向に伸びたような形になっています。断層に対し引張る力がかかり、断層のズレを

抑え込む力が弱まっているところでは、本来動きたかった断層が動きやすくなりました。福島県茨通りを除いて活断層の大きな地震はまだ起きていませんが、東京の地下では地震の数は明らかに増えています。しかし、全く用意されていないことに私たちは危機感を持っています。

東海、東南海、南海での大規模地震も、今世紀前半には必ず起きるといっぐらい差し迫っています。対策にはすぐにできるものもあれば、教育や意識の醸成など時間のかかるものもあります。急ぐべきです。

原発との関係では、例えば日本海にはたくさん活断層があり、構造的に見て大きな地震を起す可能性があります。また津波はかなり遠くまで届きます。そういう震源がしっかり調べられているか。

もう一つは活断層の調査です。地表に出なくてもかなりの規模の地震が起きるものもあり、また過小評価されている可能性があります。それらの検証なしに、原発の再稼働を認めるべきではありません。

地震学の課題としては、海溝で海側のプレートの沈

み込みが起きていて、そのまわりの最初のところから本気に壊れ地震を起すこと、それが一番の懸念だと思います。これは今回が初めてです。これまで、その下で起きている小玉をみていた。

しかし、今回そういう海底の動きがはっきり見えたのは、やはり日本の海底観測技術が非常に優れているからです。今後、5年、10年のうちには、海底の動きがより明確にわかってくる。どれぐらいの地震がどのあたりで起こるかということがはっきりするでしょう。

一部の報道では、何か、長期予測もまったくあてにならないもののようにいわれています。しかし、阪神・淡路以来、理論も技術的基礎も一歩ずつ進んでいます。今回の津波もある程度予測できていました。貞観地震(869年)の研究も発表される直前でした。

地震学の成果がゼロだといつのは、これまで原子力が地震学をゆがめてきたという問題までも、全部打ち消してしまうことになってしまいます。

聞き手 中根賢一
写真 吉武京郎

防災対策 すぐに



本の大震災」というタイトルで出版しました。「民族の言語や文化を尊重し世界の人々をつなぐエッセイ」を通じて、世界は一つだと感じます」

伸び悩む

しが困難に

た。同局は「企業が完全な事業再開に至らない中で、女性が求める条件に合わない求人情件が多く、厳しい雇用状況が続いている」と

せてみる、声をかけてみる。声がけが大切だと思っただけで、君がいなければ世界は変わらないという民書に加盟してもらった「青年は屈したままでは終わらない」とよびかけました。一歩成長しようとしていることを実感させる。討論だったものを、「全国がひとつに大きな民書をつくり、新しい日本社会をつくる」とよびかけました。

心ひとつに新しい日本を 民青第35回全国大会終わる